

宇治朝顔園の花菖蒲銘鑑について

大津市 竹岡 泰通

私は主として浪華さくらそう会と東京のさくらそう会の一員で、桜草の栽培と実生を楽しむとともに、桜草の栽培の歴史を少し勉強し、その成果を浪華さくらそう会誌に出稿したりしています。

宇治朝顔園は、現在の京都府宇治市宇治壺番 137 番地にあり、東京の農務省を退職した上林松寿氏が実家に帰り明治 22、3 年頃に創業された。明治期は朝顔のほか、菊・牡丹・ばら・花菖蒲・桜草などが扱われていた。

宇治朝顔園は、月刊雑誌「朝顔画報」「宇治朝顔園月報」を発行し、前記の植物の定価を記した銘鑑が記載されている。

上林松寿氏は京都円山派の師匠に日本画を師事し、これを基に桜草や菊・花菖蒲・牡丹・芍薬・山野草などの彩色画を多く残された。特に桜草については 229 品種一部重複するものを除く)の『明治二拾五七七年集桜草写生』が保存されている。

また明治 37 年には「宇治朝顔園月報」第 6 号に 241 品種の桜草銘鑑を掲載された。

その桜草の大多数が東京染井の常春園 伊藤重兵衛氏の『桜草銘鑑』と東京上駒込の植草園 伊藤太郎吉氏の『桜草銘鑑』記載品種に合致することから、宇治朝顔園では主として東京の常春園または植草園から品種苗を仕入れて増殖し、関西方面に販売されていたものと思われる。ちなみに当時桜草を扱う東京府の業者は、常春園と植草園が最大規模を誇り、次いで萬花園 横山五郎氏、塚万 荒井與左衛門氏が知られていた。

この『桜草写生』は、「浪華さくらそう会誌」第 17 号 (昭和 57 年度) に中村長次郎氏により全カラー写真が掲載された。

また「宇治朝顔園月報」第 6 号 (明治 37 年 9 月 15 日発行) は、「浪華さくらそう会誌」第 44 号 (平成 21 年度) に桜草銘鑑のコピーを私か送って掲載された。

私は、平成 23 年 7 月、宇治朝顔園に上林松寿氏



が残された桜草関係の文献調査のため、現園主の上林信良氏 (松寿氏は信良氏の曾祖父にあたる) ご夫妻を再度訪れ、種々お話や資料を見せていただいた。そのなかで、今回花菖蒲関係の資料が見付かったので、今回ご参考までに会報担当の佐々木氏お送りしたところ、氏から依頼を受け本稿をまとめた次第である。この中にある花菖蒲の彩色画 (上記図一部) は上林松寿氏の筆で、「植物写生画綴」(表紙は無地・無題) に桜草、ばら、牡丹、芍薬、山野草などと共に綴られていたものの中から、花菖蒲写生図一葉が見つかったので、コピーをしていただいた。

あわせて花菖蒲銘鑑を記載した「朝顔画報」第 22 号は明治 34 年 5 月 26 日に発行された。「花菖蒲種類」と題された花菖蒲銘鑑には 86 品種が掲載され、一種各金八銭となっている。

同誌に同時に掲載された桜草銘鑑には、一等三種最優等種各一種価五十銭、二等五種各一種価三十五銭、三等四五種各一種価十五銭、四等二八種各一種価十銭となっており、桜草には等級で品種の優劣が付けられている。これに比べ花菖蒲には優劣が付き、桜草よりもかなり安価になっている。

このことは、次のような桜草の事情があったものと推測され、興味深い。

①桜草は明治期後半になると、江戸末期の桜草連の掟が花戸 (植木屋) の間で払拭され、植木屋自身

が品種を自由に評価できるようになった。

②併せて桜草はこの頃に新品種の育成が進展し、蒐集した新品種が植木屋で販売されるようになり、新品種の評価が高くなった。

③東京の業者が関西在住者に販売する桜草の価格はかなり高い傾向があった。

掲載された花菖蒲の内容を、日本花菖蒲協会編の『一九九五年版花菖蒲品種総目録』と照らし合わせた結果は次のとおりである。

【初出の品種】

芝牡丹、青天上、爪折笠、宝全、舞天龍、萬理郷籠、東福寿、登天龍、霞裳口、霞之錦、熊分神、雲井鶴、瀧川錦、唐子遊、獅子分神、金雀、大宝、大湊、岩戸鏡、寿老人、旭浪、珠台山、金剛城、乙女紅、化女洞、麒麟獅子、絹笠山、蟬口瑠、天上瀧、蝶之舞、蓮城玉、大明錦、龍門、紅雲鶴、白回獅子、今様染、雲衣、錦獅子、白大輪、宇月空、白之関、龍砂川、蝶花形、朔日雲、赤獅子、遊吟龍、神冠、八ノ島、宝壺、象潟、東雲錦、曙之錦、三国一、瑠璃磐、立田川

【菖翁作出品種】

蛇籠浪、昇り龍、昇龍

【江戸系品種】

君之恵、唐綾錦、麒麟角、翠簾、竹生島、十二一重、夕空、唐織錦、紫雲龍、沖之浪

【伊勢系品種】

伊勢海

【肥後・熊本系品種】

落葉衣、大空、雲龍、千種浜、唐錦、揚羽蝶、春霞、大鳥毛、月下浪、玉冠、薄雲、紫雲格、真鶴、王節舞、雲の上、玉簾、大和錦

なお、『一九九五年版花菖蒲品種総目録』には、唐綾錦(江戸)について、1956年以前となっているが、1901年(明治34年)以前に訂正する必要があると考える。

右の品種分類を見ると、初出品種(江戸系・伊勢系・肥後熊本系の区別もはっきりしない)が圧倒的に多い反面、伊勢系品種は一品種のみ、江戸系品種に比べ肥後・熊本系品種が比較的多いことから、肥後花菖蒲の育成普及に努めた横浜の西田信常氏から

購入したことも考えられる。

花菖蒲銘鑑に初出品種が多いことについては、当時京都周辺では花菖蒲品種が華族邸・神社・寺院の庭園でよく栽培されていたと考えられ、現在でも例えば勘修寺(京都市山科区の門跡寺院)にこの種の品種が保存されていることから、江戸後期の古花である可能性が高い。そしてこのことを一部裏付ける資料が見付かった。この資料は東海道原宿(現在の静岡県沼津市原)の植松嘉代子氏所蔵の『植松家文書』(『沼津市史史料編近世2』所収)である。本書の「嘉永二(1849)年草花名録」には、当主植松興右衛門季敬氏が記した次の花菖蒲品種が記載されている。

落葉衣 紅ト紫白大ボカシシカミ曲咲大輪見事

登 龍 極紫ニ白網筋大輪大上々

立田川 戌秋求上々花菖蒲

曙錦 右ハ名古屋茂兵衛持参、代

原宿植松家は宿の内外に広大な土地を所持する大地主で庄屋として宿役人を務めていた。植松家の庭園「帯笑園」は江戸後期、庄屋屋敷に花菖蒲・桜草・牡丹・芍薬などの珍種を江戸や名古屋方面などから集め、花壇や植物栽培園を設けて大名・公家・文人・墨客などの観覧に供していた。特に江戸へ往復する京都の公家は度々ここへ訪れたことが記録されている。植松家文書の当時の日記によると、帯笑園に立ち寄った公家と親しく話し、彼らから草木や花を所望されると、それを差し上げたり、書画・扇子・和歌などを贈られたりしている。この結果、京都の公家が求めた花菖蒲の古花が永く京都周辺の神社・寺院で現在に伝えられているものと思われる。

また花菖蒲の定価が一律で桜草よりも安いことも、こうした事情と新品種の作出が桜草ほど活発でなかったことも影響しているのかも知れない。

ただ宇治朝顔園では当時の仕入先名簿や取引の内容を記録した帳簿類など関係資料が先代によって全て整理処分された模様で、正確な仕入先は不明のままであることは残持す念である。

以上、花菖蒲の歴史の一端をかいま見る話題として、何らかのご参考になれば幸いである。